

大林太良先生を悼む

吉田敦彦

大林太良先生は、世界と日本の学界に、余人によつて埋められることが当分は不可能ではないかと思われる、本当に大きな空白を残されて、昨年の四月十二日に安らかに永眠された。先生の七十二歳での早すぎる御逝去によつて、筆者は常に自分の研究の輝かしい道導と仰ぎ続けて来た、大先達を道半ばにして突然に失い、行き暮れて昏迷にくれる思いから、まだ覚めることができずにある。このような思いは、先生が研究を文字通りリードして来られたさまざまな分野で、多くの方々に共有されているのではないかと思われる。

筆者が先生から賜わり続けてきた、絶大と言うほかない御恩の嚆矢は、一九六〇年代の初頭に遡る。当時パリで研究に従事していた筆者が、そこで最初に接した先生の御著作は、一九六一年に『角川新書』として上梓された『日本神話の起源』だった。二十世紀後半における日本神話の比較研究の新しい展開

の契機となり、そのまさに画期的な出発点となつたこの名著を繙いて、筆者は、宇宙起源神話をアメノミナカヌシ、クニノトコタチ、ウマシアシカビヒコヂのそれぞれを始源神とする三群に分けて、その各群の系統をオセアニア、東南アジア、また内陸アジアの遊牧民の神話との比較から、じつに明快に仕分けした冒頭部から、コノハナサクヤビメとイハナガヒメの神話を、従来の説に従つて、東南アジアに分布の中心を持ついわゆる「バナナ型」の死の起源神話に属すると分類しながら、比較の範囲をアイヌからさらに北米にまで広げ、その上で海幸・山幸の話も含め、日向神話の全体とインドネシアの関係の深さを、あらためてはつきりと確認した結果まで、ページを繰ることにくり広げられる説の展開が、随所で旧套を破りながら、かつて堅実さを失わず、目眩くよう斬新でしかも終始きわめて説得力に満ちていることに、本当にあつと驚き心の底から感動した。中でも真ん中の辺りで、日本とギリシアの神話のあいだ

に、一見すると不思議と思えるような吻合が、数多く見出せる
ことの理由を、「古代ギリシアと日本の古典神話との、こうい
う奇妙な一致は、内陸アジアの馬匹飼育遊牧民によつて神話が
西から東へはこばれたためであろう」と、鮮明に喝破された一
文に触れたときには、それによつて目から鱗が落ちるように、
自分が抱えていた問題の一つを解く端緒が掴めたという思いを
味わつて興奮し、心に快哉を叫んだ。爾来、拙著作の中で何度も
となく引用させて頂いてきたこの二行の文は、今日まで筆者の
研究を導くアリアドネの糸であり続けてきたと言つても、けつ
して過言ではない。

その後先生は、主なものだけを挙げても、『稻作の神話』(一
九七三)、『日本神話の構造』(一九七五)、『日本の神話』(一
九七六)、『神話と民俗』(一九七九)、『剣の神・剣の英雄』(一
九八一)、『東アジアの王権神話』(一九八四)、『神話の系譜』(一
九九一)などの矢継ぎ早に上梓される一連の御著書と、枚挙に
遑がない夥しい数の御論文によつて、常に清明な新機軸を打ち
出され、比較の範囲をますます広げられながら、日本神話を系
統的に全世界の中に位置づける一方で、その構造と意味を解明
する作業を、まつしぐらに推進してこられた。そのあいだ御著
作の恵与を賜わるごとに筆者は、それまでまったく意想外だつ
た事実や解釈を教えられては、それによつて自身の研究に新し
い視野が開かれる驚きと喜びを、味わい続けてきた。

日本神話の研究を、固陋による低迷から解き放ち、面目をま

さに「新した学問として堅固な土台の上に据えた、このそれだけですに洪大なお仕事と並行して、先生はまた、『神話学入門』(一九六六)に始まり、これも主な御著書だけを挙げると、『神話と神話学』(一九九四)、『世界の神話』(一九七六)、『神話の話』(一九七九)、『海の神話』(一九九三)、『仮面と神話』(一九九八)などが続く一連の御著作によつて、世界の神話の無限とも言えるほど多様な内容を、その研究の歴史と共に総覧しながら整理し、神話が人間にとつて持ってきた意味を考え直す作業とともに、余人には及び難い博覧強記を駆使されながら取り組まれてきた。その貴重な結果としてわれわれには、一九九九年の七月に上梓された、まさに驚嘆して仰ぎ見るほかない御著作の『銀河の道 虹の架け橋』が残された。世界中から網羅的に収集された銀河と虹に関する信仰・神話・伝説を、主な地域ごとに分けて概説しながら、それぞれの觀念の分布と各文化の世界觀の中で占めてきた位置などを見事に解明した、この八〇〇ページを越す記念碑的な大著の序文の末尾に近いところに、先生はこう記されている。

私のこの銀河と虹についての本は、現在進行している私の、太陽や月についての神話の研究や、天や大地の構造についての宇宙論的表象の比較研究の姉妹篇をなすものである。その一部は、たとえば太陽の神話については、前から手掛けており、いくつかの論文を書いたこともある。しかし銀河と虹に

ついての研究が一応完結してみると、銀河と虹だけで終わらせないで、人類の世界像の歴史の中で、いくつかの関連テーマについても探求しようという意欲がかき立てられてきた。フェステイナ・レンテ *festina lente* (ゆっくり急げ)、このモットーのもとに、これら関連の研究を順番に完成していくたい、というのが私の願いである。

つまりこの御大著をこのように見事に書き上げられた時点で先生は、それまで孜孜と取り組まれてきた世界神話の御研究を集大成する *opera magna*として、このような浩瀚な比較研究を、他の主要なテーマについても次々と達成されるおつもりだった。そして太陽と月、天と地などのテーマについては、すでにその御準備に、着々と取りかかられていたのだ。

先生が『銀河の道 虹の架け橋』がその端緒と成る筈だったこの壮大な御計画を、果たされずに急逝されたことは、世界の学界にとり測り知れないほど大きな損失となつたと痛感され、本当に悔んでも悔みきれない。この御計画の全体がもし達成されていたら、それはほぼ一世紀前のある大学者フレーザーの偉業を、現在の方法と資料を駆使し更新した、世界神話の *corpus*として、現代日本の文化学の世界に誇れる金字塔となり、全世界で神話に関する研究に携わる者にとって、必須の基本文献としての価値を、永く持ち続けることになつたに違いない。そして先生の亡きあと、このような壮舉に一個人で取り組める該

博さを備えた神話の研究者は、専門化がますます進みつつある世界の学界を見渡しても、管見によればだれもいないのではないかと思われるからだ。

これらの神話研究は、先生が御生涯を通じいつも強い興味を持たれ、多くの力を傾注された分野だったと思われるが、文化人類学者としての先生の御業績の一部でしかないことは言うまでもない。本学会としては先生が、ほんの数例だけを挙げても、「天人女房」、「鶴女房」、「天道さん金の鎖」、「鮭の大助」、「早太郎」、そのほかじつに数多くの昔話や伝説を、御研究の随所で取り上げられた。そしてそれらの意味を内外の神話、伝説習俗などと自在に照合されながら、鮮やかに解明してこられたことを、深い感謝の念を持って想起せねばならない。またとりわけ、どちらも『神話の系譜』に収められた、「イザナキ・イザナミ神話と中国の伝説」および「《白娘子》と《化け鮓》」の二篇の御高論で先生が、中国の江蘇・浙江の民間伝承の中に、日本神話と構造の著しく吻合する話が見出せることを明らかにされた。そして弥生文化の原郷と目せるこの地方の口承文芸の研究が、日本神話の源流の解明に結びつく可能性を、はつきりとお示し下さったことも、先生がとくにこの学会のためにお遣し下さつた、貴重な財産の一つとして、銘記するべきだろう。

御逝去の直後には、時をほとんど同じくして刊行された御遺著の『山の民 水辺の神々』を捧受し、無量の感慨を覚えたが、先生がわれわれにお残し下さるお仕事は、それによつてまだ終

わったのではなかつたのだ。つい先頃にさうに、これも五〇〇。

ページを越す大冊の御遺著『私の一宮巡詣記』が出版された。

（よしだ・あつひこ／学習院大学）
て心の底から思わずいられない。

書名から想像されるような、單なる紀行文の集成ではなく、緻密で重厚な研究の内容を備えた、この御労作を手にして筆者には、あるとき雑談の中で先生が、初詣でに行く善男善女たちのことを、賢しらに嘲つて侮蔑的な言辞を弄する徒輩に、憤慨されるお気持ちをお漏らし下さつたことが、しみじみと思い出される。じつさい先生の御温容をお懐かしく念頭に思い浮かべながら、この本を繙くと筆者には、日本の国土の津津浦浦に祭られ、日本人の心の中に生きてきた神々に、先生がお持ちだった篤い御心情が、抑制された御筆致の行間から溢れ出て、心にひしひしと伝わつてくるのが実感される。そしてドイツ、オーストリア、米国で学ばれ、フランスをはじめ他の国々にも多くの友人や弟子を持たれ文字通りの国際人として世界を股に掛け、縦横の活躍をしてこられた先生が、醇乎たる大和心をお持ちの真正の日本男児であられたことが、今更に床しく思い出されてならない。

このように限りなくお優しく、純真で誠実で、本当に偉大であられた先生と同じ時代に生き、これまで四十年近い年月にわたつて、親しいお付き合いを悉くして頂いた。そしてそのあいだ、先生を五歳年長の先達と仰ぎ、絶えずお教えを頂き、輝かしい御業績に啓発されながら、驥尾に付して拙い研究を続けてこられたことは、筆者にとって稀有の僥倖だったと、あらため